

第一章 久遠仏性・実相莊嚴世界

躓く刹那に光明に轉向せよ

われらはたとい躓くことありとも洪面せず、その瞬間起き上りて光明に面せんことを期す。

人生にはいろいろのことが起こってきます。それは無限創造の世界であるからであります。われわれが自分だけの小さき立場から、かくあれかしと祈っても、事件は自分の欲するとおりに展開しないことがあります。しかしそれは神が諾き給わないのだろうか。否々否、この時こそ神がわれらにいつそう大なる生長を遂げしめんためにわれわれの内部より無限の力を引き出さんとしてその動機を与え給うているのであります。

あまりに裕福な家庭に生まれ、欲しいものはすべて親より与えられ、なんの労苦なくしていっさいの必要品が贅沢に揃えられるというような家庭に育った子女たちは一面においては誠に不幸な人たちであります。なぜなら、そういう人たちは、すべての善き物はことごとく外からのみ与えられて、自分自身の内部から生み出す機会を恵まれないからです。本当の幸福というものは、自分の内にあるところの善きものを生

み出すことにあるのです。他から与えられた幸福は他が立派な着物を着ているのと同じであって、自分自身の立派さでないのです。自分自身が立派になることのほかに自分が幸福になる道はないのです。自分自身に力がつくよりほかに自分の強くなる道はないのです。

かかる意味において逆境はわれわれを鍛えて、われわれの中味の善さを出してくれる冶金の坩堝なのです。坩堝の中へ投げ入れられて、われわれは鉛か金か、鍍金か本物かがわかるのです。われわれは好んで逆境を招ぶのではありませんが、逆境がいかにわれわれを捉えようとも、それはわれわれをいっそう聖化し強化するところの機会だとして、内より奮迅の力を揮い起こすものはついに大成して逆運を脚下に蹂躪することができるのであります。

されば逆境の来るごとに莞爾として微笑せよ。これが「生長の家」の生活であります。微笑は心の中に光明を点じていっさいの苦難を耐え易からしめ、失われたる希望を喚び起こし、再起の勇気を奮い立たし、暗黒なる生活を光明に轉向せしむるのであります。キリストは「死にし者に死にし者を葬らせよ」と言っています。すでに来れる逆運を嘆いたとてなんになりましょう。すでに来り終われるものは「すでに死せる者」なのです。「すでに死せる者」について嘆いてみたとしてなんになりましょう。すでに来り終われるものを嘆き悲しむ暇あらば、莞爾として新しき幸福に突進すべきであります。光明に満てる微笑こそはわれらによき運命の微笑を招ぶのです。我れ洪面すれば運命も洪面するのです。

「嬉しいぞ、これから運命が開けるのだ。」苦難に捉われず、

難関の来るごとに、莞爾として微笑しつつ奮迅の勇気を奮い起こすものこそ生長の家の生活であって、必ずいかなる難関をも征服して自己自身の力で幸福なる迎命を建設することができますのであります。

隣人を光明生活に生かせ

われらはできる限り悩める隣人を扶けてその暗黒なる生活を光明に転向せんことを期す。

人間は自己が幸迎を築き上げたばかりで満足すべきではありません。自己が幸福になったならばこの幸福を人に及ぼさなければなりません。われらは肉体的には周囲の人とはなんの關係もない一個の孤立した存在のように見えていますけれども、その実、われらはことごとく一体なのでありますから、周囲の人が本当に幸福にならない限りは、自分一個人も本当には幸福にならないのであります。単に病氣の問題のみからいつてみましても、良人の病氣が妻の心の反映から来ている場合はザラにあります。妻の病氣が良人の心の反映から来ている場合もたびたびあります。子供の病氣が親の心の反映で起こっている場合もたびたびあります。さらに祖先の靈魂の靈界での悩みが現実の世界の子供に不幸や病氣を起こして、祖靈に対して『生命の實相』の一節を読んで聞かせるだけで子孫の病氣が消えたり、運命が好転したりしてくる場合がたびたびあります。そのほか他人の嫉視憎悪反感がわれらに不幸をもたらし、それが解消することによって不幸が消え

てなくなることもあります。このようにわれわれの肉体としては離ればなれのように見えても、心の世界では一つでありますから、自分自身が本当に幸福であるためには、推し及ぼして周囲の隣人をも幸福にしてあげなければならぬのであります。ある場合には物質で扶けてあげることもよろしい。しかし物質で扶けることは一時的の救助になっても永遠の救いとはならないことが多いのです。物質で扶けてもらう習慣性がつきますと、その人の他に頼る依頼心が増大し、かえってその人の永久の救いとならないことが多いものです。ですから隣人を救うには、心に光明を点ずる方法を教えてあげる方がいっそうよろしいのであります。

といって、全然「物質」で隣人を扶けるのが悪いというわけではありません。「物質」で人を扶けてよい場合は、それは長途の坂道を重荷の車を曳いて疲労しきり、もうそれ以上は一步も車を曳いて上がる力もないし、といって力を一步緩めたら車が逆転してその人がはずみをくらって真逆様に谷底へ墜落しそうな場合です。こういう時には一時、重荷を肩代りして曳いてやるのが、その人の内からの力を喚び出すことになりましょう。しかしその肩代りは暫時でなくてはいけません。常に肩代りして重荷を別の人が曳いてやりますと、本人の筋肉は衰え、自助の勇氣は減じ、依頼心は増長し、相手を扶けようとして相手を弱めることになるのです。これは病氣の時に物質薬で扶けるのも同じことです。本人の体力が疲労困憊、みずから栄養を消化吸収する力なきある時期に、消化剤や栄養注射やリングル注射が効を奏することもあります。それは長途の坂道で疲れて転落しようとする人の重荷を代わ

って担ってやるのも同じことです。しばらく他者^{ひと}に重荷を肩代りしてもらっている間に、その人が活力を回復する——その時再び重荷をみずから担うように、生命をみずから生きるように、重荷を本人の肩へもどすことが必要なのです。医者が薬を用いるのも、人生の行路に物質で助けてあげるのも、よく相手を観察してこの心遣いが必要なのです。いつも物質を与えるばかりで人を助けるのは、年中消化剤を与えて胃腸を丈夫にしようとするのと同じことです。そんなことをすれば本人自身の消化液の分泌量は減ってしまうと同じように本人自身の自活能力は減ってしまうのです。これでは人を助けたことにならないのです。本当に助けることは本人自身の力を強め、価値を高め、その人格を向上さし、神の子そのままの自主的完全さにまで生長せしめてあげることではなくてはなりません。

このように他を救う^{ひと}ということとは、金のある人がただ金のみをダラシなくやってさえおけばそれでよいというような簡単なものではありません。それには深切なる心遣いというものが必要なのです。ただの機会^{チャンス}が儲けさせてくれた金をなんの思慮もなく振り撒いて歩くのが他を助ける^{ひと}ことでありますならば、そんな人助けは自分自身を富ませることはできません。それはただの「ダラシ無さ」です。「ダラシ無さ」は自分の知恵の貧しさ意思の弱さの現われでしかありません。そんなことでは自分自身は生長しないのです。何事にでも賢き思慮が必要です。

「物質では短期間扶けよ。温かい愛では常に助けよ」とは生長の家の標語であります。温かい愛はいくら常に与えても

与え過ぎるということはありません。明るい希望に満ちた深切な言葉、優しい眼光^{まなざし}、愛情のこもった手紙、好意に満ちた握手、愛嬌ある微笑、「何、大丈夫だよ」という激励、「愛する兄弟姉妹！」と呼びかわす言葉——これこそ永久に癖にならない魂の強壯剤であります。かかる光明を降らすような交わりこそ生命の泉であります。その生命の泉に触れるときわれわれの衰えたる活力は蘇生^{よみがえ}るのです。これは、外のものに頼るところの依頼心の増長ではありません。われわれの愛が、相手の内に埋蔵^かされていた無限の力を喚び起すのです。これこそ本当に隣人への助けです。生長の家の誌友は互いに兄弟なのですから、ただひとり聖典を読んで高慢に他を批評するようなのは本当の悟りではありません。本当の悟りは人間互いに兄弟であることを悟って、互いに好意の花葩^{はなびら}を投げかけ合うことです。好意ある微笑、希望に満ちた光明の掛声こそ失意のドン底にある人々にとってどんな物質的扶助^{たすけ}よりも、大いなる助けになるのです。

悟りとは、人を審判^{さば}くところの鋭い知識のメスを研ぎすますことではありません。悟りとは広く大いなる明るい人物となることなのです。悟りとは山に籠^{こも}って行ない澄ましていることではありません。市^{まち}に下って誰にてもあれ、魂の光明を打ち開いてその光で相手を包んでしまう人のことです。

われわれの心が狭くなれば、われわれは生長したのではなく、縮小したのです。宗教家が宗派で互いに相争っているのは醜いことです。彼らは「縮小」を「生長」と思い違いしているのです。誰にてもあれ、人を審判^{さば}く一つの尺度を持つようになつたならば、その人には「型」ができたのであり、「殻」

を造つてその中へ入ったのであり、大きくなる代わりに小さくなつたのであります。その時その人には人を排斥する力ばかりが強くなり、容れる力がなくなつて、味方となるべきはずの人も逃げ去り、事業の發展は停つてしまふのであります。

皆さんはただその人の側へ坐るだけでもなんとなく嶮しい、氣詰まりな、憂鬱な、窮屈な感じを受け取る人がありましよう。またある人の側に坐ると春風駘蕩のような感じがして、何でも打ち明けて話したい、その人の胸に飛び込んで抱擁されたいような感じがすることがありましよう。これは人それぞれの人格の雰囲氣でありまして前者のような感じがする人は何事をやっても發達しない人であり、後者のような感じがする人は何事をやっても發達する人であります。

では、どうして人格の雰囲氣にこのような相異を来すのであるかと申しますと、それは、その人のおのの心の習慣によるのであります。常に明るい打ち開いた秘密のない朗らかな心をもら、深切な言葉、優しい微笑を投げかける習慣をもちつづけているものは、終にはそれが習性となつて、誰にも頼られるところの温かい柔かい雰囲氣を放散する大人物になることができますのであります。かかる人物は何をやってもそれを扶ける人々が集まつて来、その仕事を成就するため働いてくれるのであります。

これに反して、美点を見出す代わりに常に鋭く人々の欠点を見つけ出し、何でもその人の口にかかったら、陰口や、誹謗や、不平の種にならない物はないというような人々は、どんなに知恵者で頭腦が発達していても、その人の行くところに冷たい雰囲氣が漂い、人々が叛き去り、運命も彼に対し

ては酷薄となり、物事成就せんとして破壊するに到るのであります。人を生かす者は自分も生き、人を殺す者は自分も殺され、他の欠点を指摘する者は、自分の欠陥をも審判かれるのであります。

もし、あなたの生来が冷淡な鋭い性質の人であつたとしましたら、努めて、心を温かくし、円満にし、できるだけ人の美点を見るように努め、出す言葉もできるだけ丸味のある柔かい深切丁寧な言葉を出すようにしてごらんなさい。あなたの周囲がどんなにか光明化することでしょう。今まであなたに冷淡であつた人々が深切になり、今まで強情であつた家族が従順になり、今まで冷たい沈滞した空氣に満ちていた家庭や事務所が温かい繁榮の氣に満ちたところとなるでしょう。そしてそこは生長の家となるのです。

生長の家とはわたしの家の名前でもなければ、また「生長の家」という表札を出してある大きな建築物をいうのではありません。心の法則に随つて宇宙生々の雰囲氣を漂わしている皆様自身の家庭が生長の家なのです。そういう家庭の満つる国家は、「生長の国家」であり、全世界がそういう国家ばかりになつたら、地上に天国が成就したことになるのです。何でも一歩からです。まず一人が和顔愛語の「生長の人」になることが肝腎です。顧みて自分が和顔愛語の人たらずして、人の好意と深切とを受ける雅量なく、順序を誤ったからどうか、体面にかかわるからどうか、手續にまちがいがあるからどうか、形にあらわれている一つ一つの欠点を拾い上げて、相手を審判しているようなことでは、あなたの事業は生長の家ではなくて伸びるべきものも伸びなくなるの

ですから、この点大いに御注意ありたいのであります。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社